

一般部門 優秀賞

「おとうさ〜ん、おとうさ〜ん」

原田 紹子

「お〜い、ここにおるぞ、今日は何を歌おうかの」

祖母が脳出血による半身麻痺で特別養護老人ホームに入所してから、祖父は祖母のそばで手書きの歌集を広げては二人で歌を歌っていました。そのほほえましい姿を見ながらも、私たち家族は、「祖母は祖父がいない時間、どれだけの不安とさみしさに包まれているのだろうね」と話をしたことがあります。しばらくして、足繁く通っていた祖父も認知症が進み、祖母の名前も居場所もわからなくなっていました。母が「おかあさんのところへ行こうね」と声をかけても、「おかあさんはどこにおるんか」と聞くようになり、二人の歌を歌う姿をみることはなくなりました。いつもの光景がみられない、私は心にぽっかり穴が開いたような気持ちになりました。

そして、今年の春、その祖父が眠るように亡くなりました。私たち家族は、悲しさでいっぱいでした。けれど、それ以上に、残された祖母の気持ちを考えると、やりきれなさで胸がいっぱいになりました。

ある日、祖母のもとを訪ねると、「おとうさ〜ん、おとうさ〜ん」と呼ぶ祖母の声が聞こえました。祖父を連れてこなくてはならないのかと思ったとき、「お父さんですよ」と祖父の写真が祖母の目の前に差し出されました。職員の方が、笑顔で映った祖父の写真を持ってきてくれたのです。祖母は、笑顔で映った祖父の写真を見てすうっと落ち着いたようでした。職員の方が祖母の不安をぬぐうために考えてくれたのだと思うと、心がぐっと温かくなりました。

悲しみが残る夏、亡き祖父の誕生日の前日、まるで命のバトンを受け継ぐかのように、私は男の子を出産しました。祖母にとって、初めての曾孫、きっと会うのを楽しみにしてくれているはずです。いつも笑顔でいる大好きな祖父と一緒に。

あの時、やさしい気遣いをしてくれた職員の皆さん、ありがとうございます。